

Liberal NEWS

Sincerely Thanks for 100 years
& Further patronage
for the next 100 years

PACKAGE
LIBERAL
SINCE 1917

100周年記念特別号

Contents ① おかげさまで100周年 社長ご挨拶 ②③ 100年のあゆみ ④ 沿革 一般社団法人ギフト研究所

◆ありがとうございます。おかげさまで、100周年◆



ご挨拶

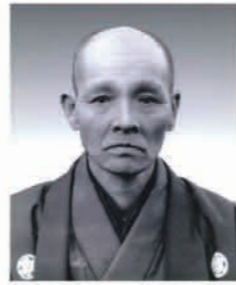


株式会社山田紙器は創業100周年を迎えます。これも偏に社業を支えていただいたお客様、お取引先様はもちろんのこと、時代とともに入れ替わりながらご苦勞をいただいた従業員の皆さまのお陰と、心より感謝申し上げます。先代は「商いは飽きない、これぞ商売の粋」と常々申しておりました。今後200年企業を目指すにはこの言葉のとおり、伝統を守りつつ時代に合わせて事業を変革することが不可欠と考えています。当社に関わる全ての皆さまの幸せにつながるよう、弛まぬ努力を続けていく覚悟でおります。

株式会社山田紙器
代表取締役 山田晴久

会社沿革

- 1917年 大正6年 港区二本榎で山田太助が「誠進堂」創業
- 1929年 昭和4年 品川区上大崎に移転
山田紙器製作所へ商号変更
取締役社長に山田庄吉が就任
- 1945年 昭和20年 戦災に遭い品川区荏原へ移転
- 1947年 昭和22年 資本金18万円で山田紙器株式会社に改組
- 1950年 昭和25年 平塚第1工場建設
- 1952年 昭和27年 平塚第2工場建設
- 1954年 昭和29年 中延工場建設
- 1955年 昭和30年 第2回DRUPA(ドイツデュッセルドルフ)視察
- 1958年 昭和33年 資本金120万円へ増資
- 1960年 昭和35年 山田龍造が代表取締役に就任
資本金600万円へ増資
- 1961年 昭和36年 越谷工場(埼玉県)建設
- 1962年 昭和37年 資本金1,920万円へ増資
- 1964年 昭和39年 野田工場(千葉県)建設
- 1968年 昭和43年 平塚第2工場にて有限会社山田紙器にて再スタート
- 1975年 昭和50年 株式会社山田紙器に改組
資本金1,000万円
- 1978年 昭和53年 川崎工場開設
- 1986年 昭和61年 本社ビル(リベラル1)完成
- 1988年 昭和63年 平塚工場を川崎工場へ統合
- 1996年 平成8年 山田晴久が代表取締役に就任
- 1999年 平成11年 川崎工場を東扇島へ移転
- 2004年 平成16年 BJセンター開設
- 2005年 平成17年 資本金3,000万円へ増資
- 2011年 平成23年 大井町に東京本部開設
- 2016年 平成28年 第13回フラワーEXPO出展
ASKセンター開設
- 2017年 平成29年 一般社団法人ギフト研究所創設
- 2017年 平成29年 創業100周年



初代 山田太助



二代目 山田庄吉



三代目 山田龍造

山田紙器企画室 Liberal NEWS 製作委員会
編集/岩村千一 発行責任者/山田晴久



Life is Gift

人を慈しむ心、その心を形として贈るギフトは、我々に幸福感をもたらします。人と人が慈しめあい、ギフトを贈り合うその美しき行いは、人の生ある限り続きます。ギフト研究所は、様々なニーズに対応し、その美しき心を最適な形にするギフトの提案を行なっております。

Life is Gift



一般社団法人 ギフト研究所

— 初代 太助の時代 —



初代 山田太助は、大正 6 年 (1917 年) 港区の二本榎に「誠進堂」という箱屋を創業した。簪(かんざし)、櫛、帯留め、草履など和装小物の貼箱を家内工業で細々と作っていた。屋号の由来は、明治生まれの太助の言葉で、代々引き継がれる山田家の家訓ともいえる教えである。この精神は、現在の企業理念の礎になっている。

物事には精いっぱい誠意をもって当たれ
物事には、まめに、真面目に一所懸命取り組み進める
人には騙されても、人を騙すな

太助は 3 人の子女を授かった。大正 9 年、長女としは創業時から働いていた熊沢庄吉を婿養子に迎えた。創業から、太助が生涯を閉じる昭和 4 年までの 12 年間、世の中はめまぐるしく変化した。ソビエト連邦の成立、日露戦争勃発、国際連盟発足、大正 12 年の関東大震災、そしてその 2 年後には大正天皇が崩御され、時代は昭和へ移り変わった。「誠進堂」は太助・チセと、庄吉・としの 4 人で、時代の流れに翻弄されながらも、ひたすら貼箱製造を続けていった。



— 二代目 庄吉の時代 —

昭和 4 年 1 月、庄吉・としに待望の男子、龍造が誕生した。この年、庄吉が 2 代目の社長となり、これを機に二本榎にほど近い品川区上大崎 (現在の東五反田) へ住居と作業所を移し、屋号を「山田紙器製作所」として営業をはじめた。上大崎に移転したころから、戦時特需の包装資材を受注し徐々に業務を拡大していった。昭和 19 年、龍造と従兄弟の田中隆喜は同時に志願して出兵する。戦火が広がるなか、昭和 20 年 3 月 10 日の大空襲で工場が焼失した。8 月 15 日に終戦を迎え、戦地から戻った龍造、隆喜は庄吉・としと共に 12 月に現本社の所在地、荏原に移転、再興することを決意した。



龍造と隆喜、そして龍造の姉タネ子の夫 瀬戸行雄の 3 名は、その後の山田紙器の成長の原動力となる。彼らは戦争で生き残った自分たちの使命を強く感じ、会社の成長を通して奉国しようと努力を惜しまなかった。昭和 22 年 3 月資本金 18 万円をもって株式会社へ改組し、山田紙器株式会社が誕生した。受注は順調に増加し、平塚第 1 工場、平塚第 2 工場を続けて建設した。リヤカーが主体だった納品も、昭和 28 年にダイハツオート 3 輪トラックを導入し、積極的に物流の合理化を進めた。昭和 29 年、ビニール業界の発展に伴い、紙器の製造と並行して巻芯を主体とする紙管の製造のため、新たに中延工場を竣工した。この工場にはスパイラル紙管製造機 (ラングストン) が導入された。更に龍造と隆喜は紙管容器という新しい分野に着目し、昭和 30 年 (1955 年) 開催の第 2 回 DRUPA (1951 年から 4 年に一度開催されている世界最大の印刷総合見本市) 視察のためドイツ・デュッセルドルフへ向かった。この視察を終えた後、ドイツから自動紙管製造設備を輸入し、紙管容器を一手に受注することが可能になった。

— 三代目 龍造の時代 —

昭和 31 年、龍造は友人の松本重男の姉 千鶴子と結婚した。昭和 33 年以降長男 晴久を筆頭に 3 男 1 女の子を授かった。昭和 35 年 病気がちだった 2 代目庄吉が旅行先で急逝、それに伴い龍造が 3 代目社長に就任し、手狭になった中延の紙管工場を越谷市大里へ移転した。



空前のオリンピック景気に沸いていた昭和 39 年、千葉県野田市に鉄筋コンクリート 3 階建ての野田工場を新設した。



更にドイツから自動製函機、ワイシャツ函自動組立機など最新鋭の設備を導入したが、オリンピック後の景気後退により受注が減少、昭和 42 年 4 月に一旦事業の整理を余儀なくされた。創業 50 年目の出来事だった。



昭和 43 年、龍造は平塚第 2 工場にて新たに有限会社山田紙器をはじめた。龍造・千鶴子には多くの支援が差し伸べられ昭和 50 年、株式会社山田紙器に改組することができた。E 段を取り扱うことによって納期短縮化・価格対応・小ロットでの受注が可能になり、また商品を預かり梱包・輸送を包括するロジスティックサービスに取組むため、昭和 53 年川崎殿町に第 2 工場を開設した。昭和 57 年、長年の激務がたたりに龍造が胃がんで倒れた。これを機に大学卒業後、伊勢丹に勤務していた晴久が入社することになった。

— 四代目 晴久 —

晴久は昭和 58 年入社直後から営業として、百貨店関連の受注を増やしていった。昭和 63 年には平塚工場を川崎工場と統合し、製造と物流加工 (組立・梱包) の合理化を果たした。バブル崩壊で景気が低迷するなか平成 8 年龍造は経営の若返りを進めるため社長の座を晴久に譲り、会長職に就いた。平成 11 年 製造販売の一体強化のため、工場を東扇島へ移転。この年龍造は完全引退を決意。平成 16 年プライダル関連の物流加工強化のため東扇島に BJ センターを開設、平成 23 年には大井町に東京本部を新設し営業と企画の強化をすすめた。



平成 28 年第 13 回フラワー EXPO に出展して花業界のパッケージ革新案を提案。平成 29 年一般社団法人ギフト研究所を創設。ギフト業界の発展に寄与を目的に、山田紙器を 200 年企業へ導くために、新たな原動力として活動を展開いたします。